
パラダイス

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラダイス

【Nコード】
N2426L

【作者名】
桂まゆ

【あらすじ】
小さな酒場に、一人の男が訪れた。「奴」に復讐するために。

（前書き）

5分大祭参加作品です

その店の名は「樂園」といった。いつからそこにあるのかは、誰も知らない。そこで働いている者でさえも。

ギィと音を立てて扉が開く。

「あ、いらっしやい」

レミイの声に客が顔を上げた。まだ、若い。しかもハンサムだ。埃だらけのトレンチコートを纏ったまま、店の片隅のテーブル席に腰をかけた青年は、乱れたダークブロンドの髪をかき上げて小さく息を吐いた。

「バーボンを、ロックで」

テーブルに酒が運ばれる。青年はコートの内ポケットから一枚の写真を取り出し、自分の前の席に置くとグラスを軽く上げる。

乾杯。

「ヒース」

小さな呟きが、その口元から漏れた。

「やっと、ここまで来た」

整った顔が歪む。どうやら笑ったようだ。

お前とは、よくこうやって飲んだな。

酒にはめっぽう強くて、女と博打が好きで。お前が金を借りに来る度に、「お前なんざ、すぐにのたれ死ぬだろうよ。香典代わりにくれてやる」と、口汚く罵っていた。

お前は「俺のような小悪党は、そうそう簡単に死なないものだ」と笑っていたな。

ヒース。お前はいつも、自分がやりたいことをやっていた。どんな時も、自由だった。

出会った時はストリートキッズだったな。埃にまみれて、いつも腹を減らして。それでも自由なお前を俺は、羨ましく思っていたと

知ったら、笑うか？

青年がもう一度、懐を探った。取り出されたのは、ナイフ。青年の瞳にぶっそうな色が宿る。

これが、何だか覚えているか？

そう、お前の腹に穴を開けたナイフだよ。

さぞ、苦しかったんだろうな。俺が駆けつけた時にはお前は内臓はらわたを掻きだしていた。

腹にあんな大穴が開いていたら、大好きな酒も飲めないな。せめて俺が飲んでやりたいが……すまない、それも出来ない。

して、やれない。だから、せめて。

ざらりと、ナイフの刃が光る。

お前の仇だけは討つてやる。だから、俺はここに来た。たどり着いた。

色んな事があつたさ。生まれて初めて喰うものに困って、泥水だつて飲んだ。この俺が。

そう、何度も挫折しそうになった。でも、ついに俺はここに来た。待っている。あいつを必ず、お前の居る地獄に送つてやる。

「あの、お客さん」

レミイが、控えめに声をかける。

ここに来る人間は、必ず理由わけありだ。それをいちいち追求していたら、キリがない。

そんなことは百も承知だが、どうにも我慢ができなかった。何しろ、独り言が長い。しかも、ぶっそうである。

いぶかしげに顔を上げた青年に、出来る限りの笑顔を向ける。ちなみに、彼が持つグラスの酒は全く減っていない。

「もしかして、飲めない？ ソフトドリンクもあるけど」

レミイの言葉に、青年はようやくと自分が声を出していたことに気がついたらしい。決まり悪そうにグラスを写真の前に置く。

「じゃあ、ホット……いや、アイスマルクを」

息を止め、ゆっくりと深呼吸をしてからオーダーを通す。

運ばれて来たアイスミルクのグラスを、再び軽く上げる、青年。
駄目だ。

今度は我慢できずに、レミイは吹き出した。
アイスミルクで「乾杯」はどうにもいただけない。

「こ、ここに来たっていうことは、もちろん理由ありなんだよね？」
レミイの言葉に、青年が眉を上げる。

「尋ね人ありって顔ね」

重ねて聞く。青年がポケットから一枚の写真を取り出した。

いかにも悪人面。痩せている癖にどこか脂ぎった、立派な背広の
壮年男。

「好みのタイプじゃないなあ」

げんなりと告げる、レミイ。

「ずっと、探していた。この街に居る筈なんだ」

険しい表情で、青年が告げる。

「ま、居るっちゃあ居るなあ」

「何処に？」

詰め寄る青年に、レミイはごくりと唾を飲む。そう、本当に顔だ
けは好みのタイプなのだ。この青年は。

「えっと、あなた」

「ジーンだ」

「ジーン。その男が何者か知っていて、探してるの？」

「ハニバル・ゲイツ。俺の親友を殺した奴だ」

だろうなあ。

レミイが心の中で呟く。先刻の長い独り言から、おおよそのこと
は推察できたから。

「ハニバルを見つけて、どうするの？」

「殺す」

そう告げた時には、ジーンの手には拳銃が握られている。

慌ててレミイは両手を上げた。

「他に、望みはないの？」

「望み？」

「店の看板、見た？　ここは『楽園』。一度だけ、願いが叶う店」
につこりと笑うレミイに、ジーンはぶっそうな笑みを向ける。

「それは、願ったりかなったりだな」

「うん、まあそうなんだけど」

「どうやら、ジーンはレミイの言葉を本気にしていないらしい。」

「だから、もう一度レミイは繰り返した。」

「あなたの、望みはハニバルと会うことなのね？」

「当たり前だ。俺はずっとあいつを探していた。その為に、泥水だ
って飲んでも生き長らえたんだ」

「泥水飲んだら、お腹壊しただろうね」

レミイの質問に、ジーンは答えなかった。

「ハニバル」

その名を繰り返し、くつくつと笑う。

「待っているがいい。必ず、俺が殺してやる」

やれやれと、レミイは肩をすくめた。

「何者だ！」

海パン一丁で美女に囲まれていたハニバルは、無粋な訪問者に眉
をひそめた。あまり、さまにならない。

「ハニバル。友の仇を討たせてもらう」

言いが早いのか、ジーンは拳銃を構えている。

ハニバルを取り囲んでいた女たちが、わらわらと逃げ出すと同時
に。

轟音が響いた。

「ヒース、やったぞ」

射抜いたのは、腹。止めはささない。もがき、苦しみ、死んで行
くと良い。

と、ほくそ笑んだ直後。ジーンの表情が凍り付く。

何をとち狂ったのか、ハニバルがげらげらと笑い出したからだ。

「僕は死なない。なぜならば」

腹を押さえていた手を除けると、そこには空洞が広がるばかり。

「もう、死んでるんだよね」

面白そうに笑い続ける、ハニバル。

「何だと？ 一体、誰に」

「病死」

背後で、レミイがぼそつと呟いた。

「肝臓癌で、あっけなくね」

ジーンの膝が崩れる。

噛みしめた唇から、血がにじんだ。

「間に合わなかった……」

ぼつりと呟くジーンを後目に、レミイは思う。

ここに来るのは、死人しにんのみ。だが、ジーンが自分の死因を知ったら、立ち直れないかも知れないな。

でも、最後の願いは叶えた。それに満足しなかったのなら、満足するまでここに居れば良い。ハンサムだから許す。

ここは「楽園」。

死者の安息を願い、願いを叶える最後の場所。

（後書き）

お祭なので、いつもと違う系統の話を書いてみました。読んで頂き、ありがとうございます。

今更ですが「看板に偽りあり」です。お祭りなので多めに見てやってください（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2426/>

パラダイス

2010年10月8日15時07分発行